# P4-2

# 乳幼児との継続交流を組み合わせた 体験型コミュニケーション教育(第7報) ~2種類のコミュニケーション授業の比較~

4.徳島大学 産学官連携推進部 5.徳島大学 全学共通教育センター 6.徳島大学 医学部教育支援センター

長宗雅美」山田進一2寺島吉保3嵯峨山和美4荒木秀夫5三笠洋明6赤池雅史1 1.徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 医療教育開発センター 2.山田こどもクリニック 3.徳島県立中央病院

## はじめに

徳島大学では全学共通教育、社会性形成科目群の授業として平成19年度 より乳幼児との継続的交流実習を組み入れた体験型コミュニケーション授業を 行ってきた。学生評価は非常に高く、徳島大学平成19年度前期共通教育賞、 平成20年度前期共通教育賞を受賞している。

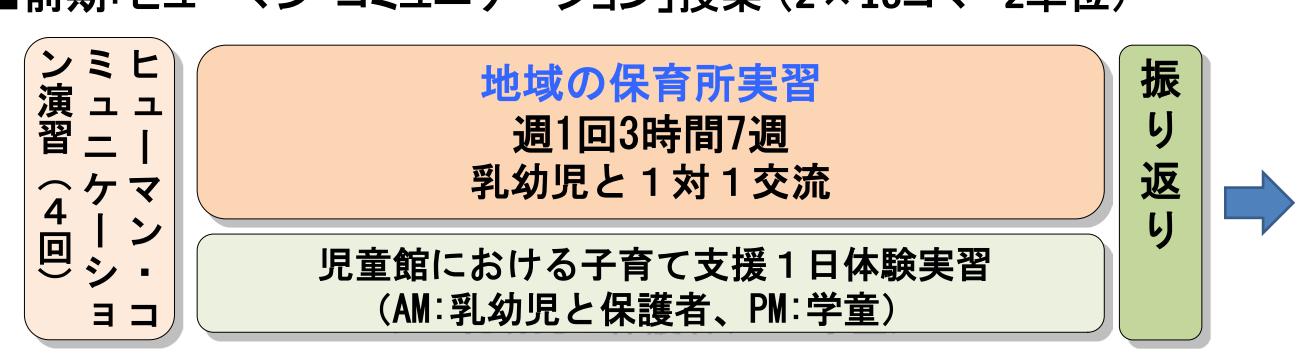
平成21年度も前年度と同様に開講予定であったが、新型インフルエンザの 影響で変更を余儀なくされた。前期は交流実習回数を減らして実施し、後期は 講義・学内演習を中心とした授業を実施した。つまり平成21年度には「人間力 を培う」ことを目的としたコミュニケーション授業を2種類の方法で実施した。

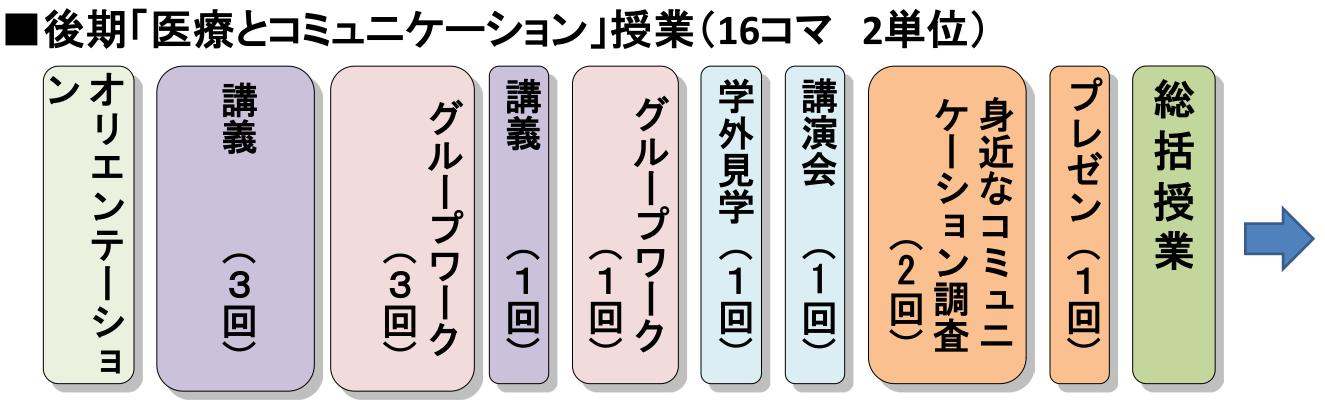
## 1目的

乳幼児との交流実習を含む授業と含まない常業を比較し、効果的なコミュニ ケーション授業の方法について検討する。

# 2 概要

### ■前期「ヒューマン・コミュニケーション」授業(2×16コマ 2単位)





## 2 対象と方法

【対象】H21前期「ヒューマン・コミュニケーション」受講 医学科1年生35名 H21後期「医療とコミュニケーション」受講 医学科1年生57名

### 【方法】①出席状況の検討

②提出されたレポートの検討 前期「ヒューマンコミュニケーション」にて提出された学内演習3回分レ ポート103枚と交流実習7回分レポート238枚、後期「医療とコミュニケー ション」にて提出された学内演習4回分レポート168枚について、小林ら1) の方法に基づき分析を行った。なおレポートの分析に関しては、中村ら 2)の報告にある分析表を参考に、学生が関与した対象(A:「自分」B[他 人 C出来事や理論など「その他」の三つの対象)と関与ステージ(心理 的不自由・知的・抽象的から心理的自由・体験的・具体的レベルへ1~ 4段階)について分類した。関与対象が「自分」関与ステージが「1」であ

③授業前後のアンケート分析

ればA1とし、以下C4までとする。

# く学内演習:グループワーク> 1.オリエンテーション、アンケート 2.講演:高塚先生「ホスピタリティ・マインドへの気づき」 3.「聴く力」+交流準備 4.「協力について」+交流準備 <乳幼児との交流実習> 特定のパートナーと1対1の継続的交流 <子育て支援1日体験実習> <振り返り> <講義>1.「脳と言語」 2.「認知能力の発達とコミュニケーション」 3.「人間行動によるコミュニケーション」 4.「コミュニケーションによる空間的行動研究」 く学内演習:グループワーク> 1.「聴き手のあり方」 2.「ホスピタリティを学ぶ」 3.「協力について」

-	考えや感情関与対象	関与ステージ(心理的自由度)			
		ステージ1	ステージ2	ステージ3	ステージ4
		不自由←視点の移動			
		頑固さ 抽象的、理論的表現	混乱と動揺 感情の動きがある	苦悶と閃き 実践してみる	柔軟さ 具体的、体験的表 現
)	A自分	体験学習への期待や不安 自己防衛	知的混乱、行き詰まり	瞬間的気づき	新しく気づいた自分 について述べる 将 来への積極的態度
•	B他人	他人に対する判断	他人の言動感情が 理解できない 他の人の言動の解 釈	他人の言動、考え 方をそのまま理解し たいと思う 他人の 感情をそのまま理 解したいと思う	他人の生きている 世界をそのまま認 められる 他人に対する尊敬 と感謝
)	Cその他	プログラム、技法、方法に 対する批判評価	理論、技法が理解 困難 自分の価値観によ る解釈	理論の理的理解 自分の価値観への 固執からの解放	理論が技法ではなく、 人間中心であること への知的気づき

<学外見学> 国際NPO活動のWS

<調査・プレゼン>

<講演会>「手話~聴覚障害者を招いて~」

4.「コミュニケーションエラー」

### 3 結果 15分以上の遅刻は全実習中1名 【①出席状況の検討】 ➡前期遅刻% ◆前期欠席% ━後期遅刻% ━後期欠席% 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 欠席率 遅刻率 【②提出されたレポートの検討】 ■レポート記載量

■記載量少 ■記載量普通 ■記載量多 27% 19% 33% 48% 交流実習7回 237枚:提出率97% 演習3回 103枚:提出率98%

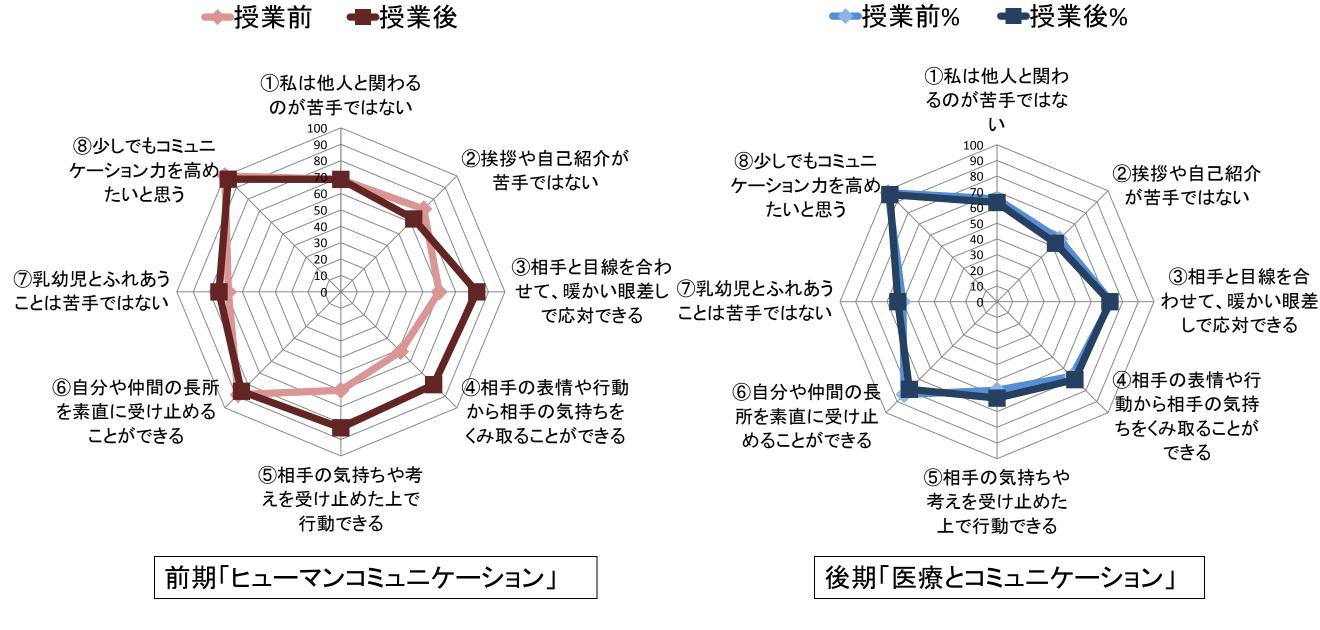
前期「ヒューマンコミュニケーション」

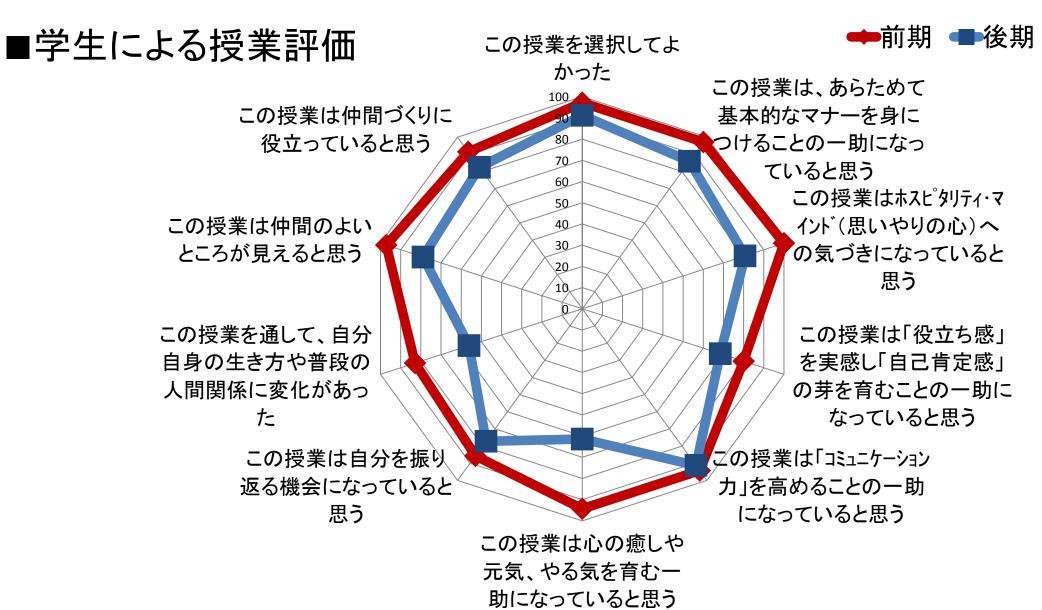
13%\_ 34% 53% 演習4回 168枚:提出率74% 後期「医療とコミュニケーション」

■関与対象と関与ステージ 120 100 80 A1A2A3A4 B1 B2 B3 B4 C1 C2 C3 C4 B1B2B3B4 C1C2C3C4 交流実習7回 237枚 演習3回 103枚 前期 医療とコミュニケーション

B1 B2 B3 B4 C1 C2 C3 C4 A1A2A3A4 演習4回 168枚 後期 医療とコミュニケーション

【③授業前後のアンケート分析】各アンケートに「そう思う」「ややそう思う」と答えた数 ■コミュニケーションに関する自己意識変化





# 4 考察・まとめ

出席状況は、時間的条件が厳しいにも関わらず、交流実習を組み入れ た授業の方がよく、コミュニケーションを学ぶ授業スタイルとして、乳幼児 (相手)の存在が大きく影響することがわかる。時間厳守や挨拶など対人 援助の基本的マナーを再確認できる意義は大きい。

レポート記載量については、どちらも約半数が普通量と判断されたが、 多く記載されたレポートは交流実習を含む授業に多くみられた。そしてそ れは実習レポートにおいてはさらに顕著であった。相手を意識して学ぶ方 法が学生にとって無理なく考える機会となりえる。これはレポート内容の 関与対象およびそのステージからも示唆されている。

授業前後の自己意識についてみてみると、前期の授業では学生の意識 に微妙なずれが生じていたが後期授業では、ほぼずれがなかった。

子育ての現場や交流に、学生の完成や自己概念を揺さぶる力が存 在するのではないだろうか。授業に対する評価は明らかに交流実習 を含む授業が高く、すなわち満足度が高いと予想された。このような 形態の授業を学生が望んでいるとも考えられる。

乳幼児との継続的交流実習を組み入れたコミュニケーション授業 は、学生の授業に対するモチベーションを保ち、感性に働きかける効 果がみられ、学生が自分自身のコミュニケーション力を相手との関係

の中で実際的に考える機会となっている。 専門教育とのつながりや、体験を自己と結び付け、知識として再構

造化する「書く力」につなげるなど、今後の発展に向けて検討してゆき

参考文献

たい。

1. 小林純一ほか:マイクロ・ラバラトリー・トレーニングにおけるグループプロセスの分析研究、相談学研究1976-1978 2. 中村千賀子ら 個人特性から見た「学外体験学習」の効果;東京医科歯科大学教養部研究紀要第27号1997年3月